

## 一、暮景集の太田道灌の歌

暮景集道灌歌、かゝる時さこそ命のをしからめの一首は、中村重頼が最後の首に向ての歌也。其身辭世の歌には非ず。一、荻生惣七郎の論語校合

相州足利學校に古版の十三經の殘本有之候。宋元以前の印本と相見、或は寫本も有之旨。當夏以來荻生惣七郎に被仰付、萬曆版・汲古閣版等と校合異同を被爲考候。時々鳩巢先生も出席有之候様に被仰渡候。如何様の書體に候や御尋申上候處、左の通被仰下候。

荻生惣七郎宅にて致校合候は、七經並孟子にて御座候。七經は五經に孝經相添申候。十三經不殘有之と相見え候所、残りは紛失と奉存候。其外文選なども參り申候。是は金澤文庫の本に候。北條氏政其時分の足利の住持に講釋聞被申、右文選を足利學校へ被致寄進候。末に氏政の名印有之候。右七種の内、書き本も有之候。印板の本も文字の形、明朝以來とは格別の物に候間、宋板又は五代時分の板と存候。惣て印板は五代馮道が時分より起り申候。其より前は皆書寫仕申候。論語・貧而樂富而好禮と申所、貧而樂道富而好禮と

有之候。道字只今の本には見え不申候故、惣七など秘藏の事に申候て、樂とばかり有之候故、孔顔之樂何事ぞと、周程など僉議に候得共、樂道と有之候へば、是にて何の僉議も不入事と申候。樂道と申はいかにしても淺く聞え申候。是は多分下の好禮に對して、後人道字を加へ申たる物と奉存候。其證據には、其所何晏が解に、たゞ樂とはかり舉候て道字は無之候。然れば彌後人之了簡にて、此一字を加へ申と存候。述而篇の擧一隅而不以三隅反の所も、擧一隅而示之不以三隅反と有之候。是もよく聞え候様には候得共、後人の附益と存候。是皆かき本にて候。書寫の人加へ申に過り有之候。當地の學者淺見にて好異申候故、かやうの儀申習し候て程朱を譏り申候。頃日承候へば長崎へ沈鬱庵と申唐人渡り候由。公儀よりも何角御尋候儀共、惣七郎並深見久太夫など承候て申遣候。如何様の人品に候や、定て何の替り申儀も有之間敷と存候。右の儀共劣甥新八郎へ御逢の時分、御咄可被下候。先頃彼方にて執御乎執御乎吾執御矣と有之候所、吾執射矣と足利本に有之候。朱子も執御にして注せられ候得共、幸ひ前漢書吾丘壽王が傳に、此論語

の語を引候所に、吾執射矣と有之候上は、足利本よろしく候。朱子も此本をば見不被申故、何の僉議も無之と惣七申候故、是は前漢書體成る證據に存候故、早速前漢書をかりよせ見申所大に違ひ申候。吾丘壽王が傳には、孔子曰執御乎執御乎とばかり擧候て、下の吾執御矣の一句は引不申候。壽王射の事を第一に申候とて、此孔子の語を引申上は、吾執射矣の筈と中てすまじに意得たるにて御座候。何れも龜淺輕薄此類にて候。此儀も新八郎へ御傳達可被下候。先日新八郎へ前漢書を考可申旨申遣候かと覺申候。存外の相違にて候。荻生氏など申儀皆此類にて、あらしき儀と可被思召候。以上。

九月十三日

室・新助

## 一、江戸小石川大洪水の事

當月初日二日當地大風雨にて、二日には小石河小日向邊大水出で、人も多く損じ申候。水人家の軒迄付候故、何れもやねへ上り命を助り申候の内、水急に候故おそく候て溺死の男女方々に有之。其様子承候へば不便千萬成儀共に御座候。小石河水戸殿御屋敷なども其通りに候。私縁者小池友

輔長屋は地高く候故無別條候。百間長屋の方春日町の方に罷在候者共は、僅に以身免候體に御座候。御城下へかやうの大水溢れ申儀前代未聞と申候。町方は水道すぎと破れ候故、水に渴き候て今以て是に致難儀候。拙者共屋敷も井類破仕り、只今外より水もらひ朝夕暮し申事に候。以上。九月十三日右御問書之内

右洪水の趣、有増左に記之。

一、廿九日夜中より雨降出、次第々々雨強く、朔日二日大風雨、二日酉の下刻雨止申候。風は北風にて雨は誠如建流に候。御城大手御橋板へ水はのり不申候。橋板より水の間五六寸許も可有之候。兩國橋・同所新橋・永代橋・淺草御門橋・柳橋・新し橋・和泉橋・昌平橋・小石川御門橋・龍慶橋とんと橋凡有名橋十八箇所、小橋の分は無限候。

一、水戸様御上屋敷御殿板敷一尺餘水上り申候。百間多門に續き有之門一つ、多門一つ潰倒れ、其時往來參りかゝり候人馬、大門の内へ流入り、溺死の者五十人許も有之候。翌日御長屋水付申所を考候へば、八尺許に水浸り候。矢の倉・御米藏を始め、凡河岸邊に有之貯米大半濡米に成候。俄に米